

一月八日、早稲田大学名誉教授の佐藤昭夫さんが八十八歳で逝去されました。

南労会二十二年争議、

〈あの解決は先生の「闘う労働法学者」としての援助なくしては果たすことができなかった、と言つても過言ではありません。〉

裁判所への「意見書」、検察への「告発状」など何通も書いて頂きました。ややこしい事この上ない南労会事件でしたが、速やかに全容を把握され、労働者の団権権がどつしり座つた論旨鮮明で簡潔な文書を素早く仕上げてくださいました。誠に見事なお仕事ぶりでした。文書は大きな威力を發揮しました。

著名な学者の鑑定意見書ともなると百万円でも高くない様ですが、そんな世界とは無縁な方でした。

心配していましたが、訃報に接し、改めて感謝の念とかけがえない労働者の味方を失つた喪失感を覚えました。

十六日東京で葬儀が執り行われ、港合同から二人が参例しました。

## 生涯 闘う学者を貫かれた佐藤昭夫先生 謹んでご冥福をお祈りします

大学関係者や弁護士、労働運動でお世話になった労働者たちが多数かけつけ、お通夜では参加者がそれぞれの思いを自由に語つて先生を偲んだと、和田弘子さん(国鉄臨時雇用員争議当該)から聞きました。

葬儀では、長女さんが涙ながらに先生の学者としての生き様、最後まで生き抜こうとした姿、闘病の経過等を語られました。病床で最後まで「九十歳にはもう一冊本を出したい」と意欲を示されていたとのこと、その執念に敬服し、さぞかしとらしく無念なことであつたらうと

思わずにいられません。大和田委員長との最期まで生きんとされた姿と重なりました。

愛弟子の早稲田大学法学部の石田教授、大口弁護士、親族代表の甥御さんからも心のこもつた御挨拶がありました。皆さんの話から浮かびあがるのは真剣勝負で学問に打ち込んでこられた鬼気迫る姿、もつとも苦しい立場に置かれた労働者にトコトン寄り添い、暖かく細やかな配慮をされていた姿、国鉄闘争に執念をもやし続けた姿、どんな困難な闘いにも展望を切り開くために労働法理論を磨き活用できるように実践的に援助されていた姿など。

また筋金入りの軍国少年であつた先生は、戦後、生まれ変わるのに数年間の総括の時を要したとの話も伺いました。奥深い思想の原点はそのようにしてつくれたんですね。

戦争や原爆を許さない闘いを毅然と貫かれた先生でした。

☆ ☆ ☆  
一目ぼれされ「自分の姓を褒

えるから一緒になつて欲しい」と先生から求婚されたという奥さんは「寝ている時もいつも考えているようで、ガバツと跳ね起きては机に向かつていた」「今も、いつもの考えている顔で寝ているよう」「(私は)空気がなくなつた中で生きている心地です」と、静かに深い悲しみを語られました。

先生、あの世で大和田委員長や辻岡さんと語らい、私たちの運動を見守ってくださいね。

南労会支部

